

韓国語聖書翻訳にいたる初代宣教師達の活動

後藤田 遊 子

目 次

1. 中国と日本における中国語聖書翻訳と日本語聖書翻訳
2. 満州、日本における韓国語聖書翻訳
3. 韓国における韓国語聖書翻訳
4. 神の訳語
5. まとめ

19世紀のアメリカ、イギリスで巻き起こったプロテスタントの福音主義運動¹は、外に向かって広く海外伝道の必要性を唱え、海外伝道協会を設立し、宣教師を海外へ送り出していた。同時にプロテスタントの伝道における唯一の武器である聖書を海外の諸民族の言語に翻訳し出版する目的で聖書協会が設立され、その活動を広範囲に行っていた。

19世紀の中頃、韓国語の聖書が初めて訳出された経過をたどっていくと、最初の聖書の韓国語訳は、満州で、そして少し遅れて日本で行われていたことが分かった。さらに、それらの聖書は中国語訳の聖書から訳出されていたのである。このことから、本稿では、初期の韓国語聖書翻訳に関して、中国、日本に入国したプロテスタント宣教師達の活動と韓国におけるプロテスタント宣教師達の活動をたどってみる²。

1. 中国と日本における中国語聖書翻訳と日本語聖書翻訳

韓国語訳聖書の由来を知るために、まず、日本語聖書翻訳や韓国語聖書翻訳に大きな影響を与えた中国語聖書が訳出された過程と、韓国に先立ち日本で先駆的活動をおこない韓国伝道の道ぞなえをした宣教師たちの日本語聖書翻訳の過程をたどってみる。

ロバートモリソンの中国語聖書翻訳

モリソン (Robert Morrison) は 1782 年、イングランドのノーサムバランド州モルベスで、靴の木型製造業を営む親の元に生まれた。少年時代から父の職業を継ぐため靴の木型製造の見習いをしていった。十代の後半には、当時強い勢いのあったメソジスト運動に参加し熱烈的な伝道的信仰を身につけていった。

1804 年、21 歳の時、海外伝道の目的で設立されたロンドン宣教会 (London Missionary Society, 1795 年設立) に海外派遣宣教師として採用された。その当時ロンドン宣教会はアフリカ大陸やインドに宣教師を派遣する計画を立てていた。また、もっとも伝道が困難と考えられていた中国にも宣教師達を派遣したいという考えを持っていた。そしてモリソンに白羽の矢がたった。モリソンはその申し出に応じた。中国への渡航前に、モリソンは『四史修編』

(*Quatuor Evageria Cinice*) という漢文写本を大英博物館で発見する。付記された英文に、「この写本は 1737-8 年に広東において、東インド会社のホヂソン 2 世のもとめにより作成された」とあった。その漢文写本は、17 世紀にカトリックの宣教師によって訳出されたものらしいが断定はできないと言われている(海老澤, 1981: 100)。文書の内容は中国語訳の「対照四福音書」(*The Harmony of the Gospels*)と「使徒行伝」と「使徒パウロの書簡」だった。実はモリソンの発見にさきだち、ロンドンの組合教会 (*Congregational Church*) の牧師モズレー (*Willim Moseley*) は鎖国状態の中国への伝道を訴え、まず聖書の中国語訳をしその日に備えるべきだとの考えを持っていた。1804 年にモズレーは大英博物館でモリソンより一足先に『四史修編』を発見し、その年に設立された英国聖書協会 (*The British and Foreign Bible Society*) に対し、『四史修編』の筆写と印刷、出版をしたいと申し出たが費用が高くつくことで断られていたといういきさつがある。モリソンは、このモズレーからロンドンに滞在中の広東人青年 *Yong Sam-Tak* を紹介してもらい、彼の協力により漢文写本の解読をした。モリソンはある程度中国語が上達した段階で、この写本を持参して 1807 年、イギリスを発って中国に向かった。

アメリカを経て中国の広東へ渡ったモリソンは、東インド会社の中国語の書記兼翻訳官の仕事をしながら聖書の中国語翻訳に精を出した。1810 年には新約聖書の使徒行伝を出版した。これは、彼がロンドンから持参した漢文写本を踏襲したものだった。これ以後、モリソンはルカによる福音書、マタイ、マルコによる福音書を手がけていき 1813 年に新約聖書翻訳を完了した。さらに旧約聖書の翻訳を進めていき、1819 年に旧新約聖書の中国語翻訳の完成にこぎつけたのだった。モリソンはこれらの翻訳にあたって、理解されない言葉よりも平易な言葉を用いること、中国の哲学や宗教に用いられる言葉をさけることなどに注意したと述べている。またモリソンは、1813 年に「英華字典」(*Anglo-Chinese Dictionary*) を作成し出版したが、この字典は中国語の辞書であり、中国の地理、歴史、風俗、制度、習慣、文学、その他、中国人の生活に関するすべてについて述べた百科事典であった³。

ギュツラフの日本語聖書翻訳

モリソンは 1843 年、52 歳で広東にて永眠したが、彼の志はこの後もロンドン宣教会とその姉妹関係にあるアメリカの海外伝道団体、アメリカンボード (*American Board of Commission for Foreign Mission*) から送られてきた宣教師達によって引き継がれていった。中でも、ギュツラフ (*Karl Friedrich Augustus Gutzlaff*) は、モリソンの志を受けて、日本布教の先達となるとともに日本語聖書翻訳の先駆者となった。

ギュツラフはドイツのポメラニアに生まれた。1823 年、21 歳の時、東南アジア伝道を志し、オランダ伝道会に入会し、1825 年にジャワに向かい、さらに翌年バタビヤに着いて、同地在住のロンドン宣教会の宣教師メドハースト (*W. Henry Medhurst*) の世話になったのである。メドハーストはモリソンについて東洋に派遣され、後から来る宣教師のため、東洋の諸国語を研究していた。彼は、バタビヤにて「日英字典」を出版している。彼はそのころすでに作られて

いた日蘭字典や日蘭華字典を参考に、また当時バタビヤに在住していた日本人の協力を得てこの字典を完成させた。ギュツラフはメドハーストに刺激され、日本伝道を志すようになっていった。ギュツラフがモリソンと最初に会ったのは1831年、マカオであった。そこで、ギュツラフはモリソンから中国語訳聖書やキリスト教文書を託された。それらを携えて翌年、東インド会社の視察団の一員として、同社の船「アマースト号」に乗船して中国北部の旅に出た。船は北上して朝鮮半島に近づき、沿岸の所々に上陸したので、ギュツラフはモリソンから託された中国語訳聖書やキリスト教文書を韓国人に配布した。次に南下した際に日本の島々に近づいたものの、日本は厳しい鎖国体制であったため上陸することはできなかった。ギュツラフの韓国訪問はほんの立ち寄りだけのものだったが、彼は韓国に中国語訳聖書を持ち込んだ初めてのプロテスタント宣教師であったこと、その聖書がモリソンの中国語訳聖書であったことは興味深い。なぜなら、この後の韓国語訳、日本語訳の聖書はこのモリソンの中国語訳聖書の改訂、改訳されたものを使用したからである。

モリソンの死後、ギュツラフは1835年ごろからモリソンの息子のジョン等とともに、モリソンの中国語訳聖書の第1回目の改訂に着手している。この改訂はその後も続き、1861年に新約聖書、1863年に旧約聖書の完成をもって終わった。これらは、上海美華書館から出版され、上述したように日本語聖書翻訳に多大な貢献をすることになる。

1835年からギュツラフは聖書の日本語訳に取り組み始めていた。日本人漂流民から日本語を学びながらの作業であったから、その苦労は並大抵ではなかったろうし、その日本語も宗教的というにはあまりにも乏しいものであった。こうして出来上がった最初の日本語訳聖書は『約翰福音之伝』（ヨハネ福音書）で、1837年に刊行された。

この日本語訳聖書は米国長老会の宣教師、ヘボンを通して日本に持ち込まれ、初めて日本に紹介された日本語訳聖書となった。ヘボンがこの聖書を日本に携えて入国したのは、1858年7月に「日米修好通称条約」によって日本が門戸を外国に向かって開いた翌年、1859年のことであった。これによって日本のプロテスタント伝道の先駆者として功績のあった宣教師達が入国してきた。そのうちの代表的宣教師がヘボンだった。

ヘボンを中心とした日本語聖書翻訳

日本へやってきたプロテスタントの先駆者達、その中でも代表的宣教師がアメリカ長老教会のジェームズ・カーティス・ヘボン（James Curtis Hepburn）だった。ヘボンは、聖書の日本語訳ばかりではなく日本キリスト教史上多大な貢献をした宣教師である。以下、『日本聖書協会100年史』（日本聖書協会、1975）からヘボンが日本に到った様子を引用してみる。「ヘボンは米国ペンシルベニア州に生まれ、プリンストン大学で化学、ペンシルベニア大学で医学を修めた。医者のない国で医療に当たりたいと考え、1843年、米国長老教会外国伝道局の宣教師としてアモイに施療病院を経営した。しかし家族の病気と死のため、2年後にアメリカに帰り、13年間ニューヨークで開業医として成功をおさめていたが、1858年、日本開国の報に接して

後藤田 遊 子

日本伝道に献身を決意し、開業中の病院を他に譲渡して、自費で日本を目指して出発した。そのとき、聖書日本語訳の参考にしようと、1841年シンガポールで入手したギュツラフの『約翰福音之伝』を携え、1859年(安政6年)10月神奈川に渡来した。成仏寺で3年間、医者や英語教師として働きながら日本語を学び、1861年(文久元年)春からマルコ伝の翻訳に着手した。こうして、1861年からヘボンが聖書の日本語訳を始めたのである。ヘボンの最初の日本語訳聖書は中国語訳からの転訳であったことがヘボンがアメリカ聖書協会にあてた書簡から認められている。また、その中国語訳は上海美華書館刊の「新約聖書」であったと言われている(海老澤、1981:147)。この後、ブラウン(Samuel Robbins Brown)が1859年神奈川に着きヘボンに迎えられ、以後ヘボンとともに聖書翻訳に貢献している。1872年に、日本在住の各ミッション合同の第1回宣教師会議が横浜のヘボン宅で開かれた。この会議で新約聖書の共同翻訳、讚美歌編集等の事業が計画された。この中で各ミッションボードから選出された1名ずつの委員、そして日本人補佐を決めて、「聖書翻訳委員会社中」を発足させることとなった。翻訳に際して、委員達はジェームズ王勅定英訳を底本とし、日本人補佐は前述の上海美華書館刊の中国語訳「新約聖書」を参考にしたといわれる。つまり、日本語があまりうまくない宣教師と英語やギリシャ語が解せない日本人補佐との共同作業であった。

翻訳委員会社中は1880年に新約全書の翻訳を、1887年に旧約全書の翻訳を完成するのであるが、ヘボンは、他の宣教師や日本人補佐とともに、その最初から最後まで重要な翻訳者として中心的役割を果たした。また、ヘボンは最初の和英辞典『和英語林集成』の編纂をなし、その字典の初版は現在ヘボン式ローマ字として知られているローマ字を用いたことでもよく知られている。ヘボンは1892年に33年間に渡る日本での宣教活動を終えアメリカに帰った。

2. 満州、日本における韓国語聖書翻訳

韓国語の聖書はプロスタントの宣教師が韓国に入国する前に、満州で、そして少し遅れて日本で既に翻訳がなされていた。翻訳と頒布の中心的役割を担ったのは、他ならぬ韓国人だったのである。

宣教師ロスと徐相崙

英国聖書協会の報告により、1880年にすでに満州のモクタンに駐屯していたスコットランドの連合長老会の宣教師ジョン・ロス(John Ross)とジョン・マッキンタイアー(John McIntyre)が韓国人の助けを得て、聖書を韓国語に翻訳していたことが分かった。その韓国人というのが、徐相崙であった。

徐相崙と徐相佑の兄弟は1878年に満州で行商をしていたときロスと出会った。彼らは商売に失敗し最悪の状態であった。徐相佑は病気で、落胆のあまり自殺をしようとしたのである。徐相佑は宣教師が経営する病院で手当を受けたが、これが縁で、ロスを通してキリスト教に触れ、徐兄弟は改心をしたのである。しかし、ここで洗礼を受けたのは兄の徐相崙だけで、弟は洗礼を受けず韓国へ帰った。徐相崙はその後、ロスに伴って満州のモクタンで聖書の翻訳と印刷の

手伝いをしたのである (Paik, 1929 : 52)。徐相崙はこうして出来上がった聖書を携えて、満州から国境地域、さらにはソウルまで聖書を頒布して歩いたのである (関、1981 : 163)。後に、アンダーウッドが韓国に入国し、既に聖書が韓国人のあいだに出回っていることを知って驚くのであるが、その聖書というのが、ロス訳聖書で、徐相崙が頒布して廻ったものである。

ロスを中国に送ったスコットランドの北英国聖書協会 (National Bible Society of Scotland) は、モリソンが韓国に立ち寄ってから 30 年後の 1865 年にプロスタントの西欧宣教師として、モリソンの次に韓国に立ち寄ったスコットランド人宣教師トーマスを通して韓国に聖書をもたらした最初の聖書協会であり、もっとも早い時期に韓国で聖書の普及に貢献したのであった。宣教師ロスの活動を資金面から、印刷、出版まで援助したのも北英国聖書協会であった (Paik, 1929 : 56)。1882 年にルカによる福音書とヨハネによる福音書が翻訳され、3000 部印刷するための活字が日本における北英国聖書協会 (日本では「北英国聖書会社」として 1875 年に横浜ですでに業務が開始され、印刷および頒布にあたっていた) で選ばれ送られてきた。印刷が終わると 1000 部が北英国聖書会社に送られ、日本から韓国の各地に向けてそれらの聖書が新たに頒布された (Paik, 1929 : 57)。ロス訳の新約聖書が完全に翻訳され、出版されるのは 1887 年であった。

ロスは宣教師としての使命のみならず、韓国人、韓国語に興味を持ち韓国人の助けを得て、まず Korean-English Primer という外国人としては最初の韓国語研究の本を発行した。そして後に *Corea, Its History, Manners and Customs* という韓国史の研究には欠かせない本を執筆した。(Paik, 1929 : 54)

1875 年に日本の横浜に設立された北英国聖書会社は、北英国聖書会社社長の長坂毅を最初の派遣員として韓国に派遣している。長坂は 1883 年 7 月に釜山に到着し中国語訳聖書、日本語訳聖書の売りさばき、韓国語のキリスト教文書の配布を行った (Paik, 1929 : 57)。長坂の韓国行きに関しては、キリスト教関係の新聞、『福音新報、関西』1883 年 7 月 17 日号に、聖書売捌支店を設立するために韓国に赴いたという記事、同年 7 月 24 日号には「朝鮮伝道」というタイトルで「長坂氏には聖書と他の書類を携え朝鮮の景情を探り、傍ら伝道の端緒を開かんが為に釜山元山仁川を過らるる積もりの由……」という記事が掲載されている。また、北英国聖書会社は、1883 年 8 月 21 日の『福音新報、関西』に、韓国へ出張し聖書売り捌いてくれるキリスト信者を求むという広告を出している (小川、池、1984 : 12) ことから、宣教師の働きかけにより、日本人がその当時、少ない人数ながらも、聖書販売人として韓国に渡っていたことが分かる。

李樹廷の韓国語聖書翻訳

李樹廷は最初の日韓教会交流を象徴する人物で、日本滞在中に横浜にて、マルコによる福音書の漢字ハングル混じり文の訳と、四福音書と使徒行伝の中国語訳聖書にハングルの訓点をつけたものを印刷刊行した (小川、池、1984 : 5)。

李樹廷の生い立ち、経歴等ははっきりしていない。彼は、壬午軍乱 4 以後日本視察に遣され

後藤田 遊 子

ていた修信使、朴泳考等の使節団の非公式随員として日本にわたった。この使節団は親日的な開国派によって派遣されたので、李樹廷も日本の近代化を学ぶために、農業近代化の調査研究を目的として来日した。この時、彼は40歳だったらしい(李、1970:65)。日本に来ると、当時のキリスト教の重鎮であった学農社の津田仙を訪ね、それが縁で、その後、津田の導きで受洗するにいたった。この間の事情は日本における最初のキリスト教雑誌『七一雑報』の1881年11月25日号に津田仙との出会いが報じられ、1883年5月11日号には、李樹廷が日本に来るに到ったいきさつ、洗礼を受けるに到ったいきさつが報じられている(小川、池、1984:28)。

彼は津田仙に会い、農業に関する教えを受け、親交を篤くしつつ、彼から聖書とキリスト教教理について傾聴するようになり、ついに1883年4月29日の主日に、芝露月町教会で受洗した。キリスト教についての彼の熱意はそれで終わらず、日本駐在の長老教会宣教師ノックス(George W. Knox)、および監理(メソジスト)教会宣教師マックレイ(R. S. Mclay)牧師に接近して、聖書研究に全力を注いだ(関、1981:160)。

当時、米国聖書協会総務で30年間日本で活躍したルーミス(Henry Loomis)が彼を訪ね、福音書を韓国語に翻訳する事業を引き受けてほしいと要請したとき、彼はこれを受諾、即座に翻訳を始めたのである。ルーミスは李樹廷について、「彼の語学の才能は感嘆に値する。日本に来て9カ月の間に日本語を流暢に話し、また日本語で正確に説教をし日本人を驚かせた。さらに、彼は漢詩を創作する才能を持っていた」と、賞賛している(李、1970:66)。李樹廷の語学の才能をもって、ついに1884年、中国語訳聖書に韓国語の訓点がつけられた『マルコ福音書』が横浜の米国聖書協会を通じて1000部出版された(李、1970:161)。この中国語訳聖書は、ヘボンや翻訳委員社中が使用した上海美華書館刊の中国語訳新約聖書であった。その後、彼の翻訳は韓国語の学者たちに回され、検討され改善された。このことは、こうした韓国語訳の聖書が、後に、宣教師に引き継がれ、修正、改訳されていくことを意味したのであった。

李樹廷は日本に滞在中、聖書のみならず中国語のキリスト教文書を韓国語に訳すこと、また雑誌に韓国の生活、習慣を書き広く西欧諸国に韓国を理解してもらう努力をした。彼の努力それだけにとどまらず、ノックスやルーミスの支援のもとに、アメリカのキリスト教会にむけ韓国に宣教師を送ってくれるよう嘆願書を送ったりもしたのである。彼が韓国に戻ってからの消息は、これもはっきりしない(Paik, 1929:79)。ルーミスは1885年10月に韓国を訪れ、米国聖書協会を当地に開設するかどうか下見をしたが、政情が不安定であることと、まだキリスト教にたいして禁制がしかれていること、そのためまだ聖書協会を開設するには至らないとの結論をだした。

3. 韓国における韓国語聖書翻訳

アメリカの教会が韓国に興味を持ち始めたのは日本で伝道するアメリカの宣教師たちを通してである。韓国がアメリカと修好条約を結んだ1882年頃を見計らって、米国聖書協会のルーミス、長老教会のノックス等は、アメリカの教会に手紙で韓国への宣教師派遣を依頼している。

また、李樹廷もこれらの宣教師を通してアメリカの教会に韓国に宣教師を送って欲しいと嘆願している。(Paik, 1929 : 84) 韓国に正式にプロテスタントの宣教師が入国したのは1885年であった。その宣教師はアンダーウッドだった。

アンダーウッドと韓国語聖書翻訳

アメリカ人宣教師として初めて正式に韓国の地を踏んだのは、アンダーウッド (Horace G. Underwood) で、1885年4月5日のことだった。それまでに韓国に入国したプロテスタント宣教師たちは、宣教師として入国を許可されたのではなかった。アンダーウッドは韓国から正式に入国を認められた最初のプロテスタント宣教師であった。韓国ではこの年をプロテスタント宣教1年と決めている。

アンダーウッドは1859年ロンドンに生まれた。13歳の時、父や兄弟とともにアメリカへ移住した。1881年に New York University を卒業し、ニュージャージーのオランダ改革派教会のニュー・ブルンズウィック (New Brunswick) 神学校に入学、1884年に修了した。この神学校を修了した宣教師には、その頃既に日本に渡り、日本の先駆的宣教師として活躍中のブラウン (S. R. Brown)、バラ (J. H. Ballagh) がいた。

ちょうどその頃、1883年にコネチカットのハートフォードで開かれた神学校連合会 (the Inter-Seminary Alliance) で、アンダーウッドは韓国への伝道の必要性を説いた。その一部を紹介すると、“ In the winter of ‘82-’ 83 the Rev. Dr. Albert Oltman, now of the Meiji Gakuin of Tokyo, but then a student, gathered the volunteers at New Brunswick together, and read them a paper he had been appointed to prepare on the Hermit Kingdom at last opened by treaty to the Western World. The simple story of these twelve or thirteen million without the Gospel; the door, opened, through Admiral Shufeldt’s treaty in 1882 and the thought of a year and more having passed without a move on the part of the church, so stirred the speaker, that he determined to set to work, and find someone to go.” (Paik, 1929 : 108) と彼は発言し、韓国伝道の必要性を説き、アメリカの伝道協会がいまだ韓国への伝道を早すぎる (watchful waiting) としているのに対して、是非自分が韓国へ行こうと決意したことを語った。1884年7月28日アメリカの長老派教会の伝道委員会はずいに、アンダーウッドを韓国に派遣することを決めた (Paik, 1929 : 109)。

アンダーウッドは1884年の12月にサンフランシスコを発ち、1885年の1月に日本に到着した。そこで、ヘボンに出迎えを受け、彼の自宅に滞在して、韓国への出発準備を行った。アンダーウッドは李樹廷を紹介され、彼から韓国語を習った。その頃には、李樹廷が訳した、中国語訳聖書に韓国語の訓点がつけられた『マルコ福音書』が横浜の米国聖書協会を通じて1000部出版されていて、アンダーウッドはこれを韓国に入国するときに携えて行ったのである (関、1981 : 161)。

アンダーウッドが来韓した1885年に、韓国の先駆的宣教師たちが来韓している。特にアメリカ監理教会のアペンゼラーはアンダーウッドとほぼ同じ頃に韓国に入国し、以後互いに協力しながら、伝道、聖書翻訳に従事していった。

後藤田 遊 子

アンダーウッドはアペンゼラーと協力して、李樹廷の『マルコ福音書』を修正出版し、さらにロス訳のルカによる福音書を修正した (Paik, 1929 : 148-149)。ロスと李樹廷の訳はやむおえず日本語や中国語から韓国語に翻訳したものだ。それには聖書の言語と韓国語の両方に精通した外国人による校正というものは無かった。こうしたパイオニアの翻訳には頭が下がる思いではあるが、大げさな表現、大量の中国語の派生語、方言、誤訳、曖昧な訳文、古体の活字が多くあった。そのためにこうした翻訳聖書を修正するよりも新たに翻訳し直す方が早い、と初期の宣教師は述べている (Paik, 1929 : 149)。そうした状況にも関わらず、あえて修正出版したアンダーウッドとアペンゼラーの努力は計り知れないものがあったであろう。取り組まなければならない韓国語の手引き書はないに等しく、アンダーウッドは、プロテスタントの宣教師が韓国に入国する以前からこの地を開拓していたフランス人のカトリック宣教師や、韓国人のキリスト者から韓国語を学んでいった。

韓国語がインドヨーロッパ語とは言語学的にまったく類似性がないので、西欧人が韓国語を修得するのには苦勞をするのである。韓国語には独特のアルファベットがあり、文法は英語国民には難しい。性別があいまいであり、人称と数に関する考え方は文脈に沿って決定される。しかし、西欧人にとってもっともこまることは、動詞が非常に複雑な使われ方をするということである。厳しい社会階級の意識が尊敬語の体系を作り、韓国語を上手に使うには、この尊敬語を適切に使うことが基本とされている。また、文章と話し言葉とではずいぶん使い方が異なる。韓国語には韓国語独特の文法があるが、文章には非常に多くの単語を中国語から取り入れて使われている。それは、一つには文章を飾る目的と、もう一つには正確を期する為であった。初期の宣教師達にとってきちんとした文法書がなかったことは彼らを途方にくれさせることとなった。そんな中で、唯一頼れた韓国語の手引きがフランス人のカトリック宣教師の手引き書とロスが書いた韓英語入門書 (Korean-English Primer) であった。もちろん、適切な指導者もない困難な状況の中で書かれたものだけに、間違いが多くあまり役に立たなかったという (Paik, 1929 : 141-143)。

アンダーウッドとアペンゼラーがおこなっていたように、こうした聖書翻訳は当初、宣教師が個別に取り組んでいたが、1887年にアンダーウッドが日本に行った際、ヘボンから、既に日本では軌道に乗っていた超教派の聖書翻訳委員会を韓国でも作るようにアドバイスをうけた。韓国に戻るとすぐにソウルで伝道しているすべての宗派の宣教師達が集まって会合をもち、聖書の韓国語への翻訳、改訳、監修、出版に関する決議がなされた。以後、宣教師達の努力によって新約聖書の改訳修正版が完成していった。アンダーウッドは1916年に病気の悪化によりアメリカへ帰国する事になるまで、聖書翻訳のみならず伝道の中心的役割を担っていた。

4. 神を表す言葉の翻訳

モリソンの中国語訳聖書に始まって、ギュツラフやヘボンの日本語訳聖書、ロスやアンダーウッドの韓国語訳聖書において、彼らの抱えた大きな難問が、中国、韓国、日本のクリスチャ

ンにキリスト教の神をどう伝えるかであった。これらの国には最高位の神を表すための言葉がいくつかあったが、宣教師たちはその言葉を使うのをためらったのである。それは、誤解をおそれたのだった。というのは、人々は一つの神だけを崇拜する事になれていないため、キリスト教以外の神を同時に崇拜する、いわゆる多神教の考えを引き起こすことを恐れたのだった。どうしても唯一の神を表す訳語が必要だった。

中国語の新約聖書を完成させたモリソンは唯一神を「神」と訳している（都田、1974：184）。彼は、ロンドンの大英博物館で発見した漢文写本を踏襲して、使徒行伝を訳したのであるが、この漢文写本において「神」が用いられていたため、そのまま「神」を用いたと思われる。モリソン訳聖書は改訂しながら版を重ねたが、1843年、香港で開かれた宣教師会議で改訳が決議され、そこで問題となったのは唯一神を「上帝」とするか「神」とするかであった。ここでは、「上帝」を採用することに決定された。（都田、1974：103）。

日本語訳聖書の草分けのギュツラフは「神」をとらなかった。彼は、中国の宗教思想に精通するにつれ、「神」は精神、精霊、鬼神の意で一般に用いられていたからで、彼は、協力してくれた漁民の理解に従って訳語を選定したようである（都田、1974：111）。彼は唯一神を「ゴクラク」と訳したのである。

ヘボンをはじめとする聖書翻訳委員社中は、モリソン以来の「神」を継承して、中国でなされたような議論はなされていない（海老澤 1981：220）。

では、韓国ではどうだったのであろうか。韓国においても、「天主」、「上帝」といった議論があったが、宣教師達の間で「ハナニム」が訳語として選択されたことで、このことに関する議論は終止符を打った。ハナニムは韓国の天孫降臨神話「壇君神話」にでてくる最高神である。つまり、最高神という観念が韓国人の中にすでにあっただけで、宣教師達はこの観念を利用し、韓国人にハナニムが唯一神であることを教えればよいとの考えが浸透していた。そして唯一神をハナニムと呼ぶことは韓国人にとっても喜ばれた。アンダーウッドは当初、ハナニムを唯一神の訳語とすることにためらいがあった。彼は、中国語や日本語で採用された「天主」「上帝」といった一般的な訳の方が、韓国固有の神を訳語として使うより危険がないのではないかと考えていた。そこで、当初、讚美歌の翻訳にハナニムを使わなかった。しかし、ハナニムが宣教師達の間で広く浸透し、もはや収拾のつかないところまできていたので、更に研究を進め、ハナニムが三国時代に登場し、最高かつ唯一の神として用いられていたことをつきとめることができ、ハナニムを唯一神の訳として使うことに最終結論を出した（Underwood, 1918：126）。

5. ま と め

中国語訳から日本語訳へ、そして、韓国語訳聖書翻訳へいたる過程を見ていると、それはプロテスタントの東洋伝道の歴史と重なる。その歴史はまず中国から始まった。本稿で取り上げたのは、ロンドン伝道協会から中国に派遣された、モリソン、ギュツラフ、メドハーストなど、そして、アメリカンボードから派遣された、ヘボン、S. W. ブラウンなどであるが、皆、中国

後藤田 遊 子

を経て日本に関心を寄せていった宣教師達である。そうした中で韓国はまだ周縁部に位置していた。その後、日本で活発な伝道をしていったのは、主にアメリカンボードや他のアメリカ伝道協会で、日本を経て韓国に関心を寄せていったのも主にアメリカの伝道協会であった。しかし、韓国と中国との国境は地続きで、地理的状况から見ても日本を経ない、異なった動きがあつてしかるべきであった。

アンダーウッドは日本で、李樹廷訳の『マルコ福音書』を手に入れ、それを携えて韓国に渡ったときに、韓国には既に韓国語訳の聖書が出回っているとは夢にも思わなかったはずである。ところが実際は、韓国と中国の国境で、スコットランドから中国に入国し、満州で伝道活動をしていたロスと韓国の韓国語訳の聖書が出回っていたのであった。国境の町は周縁部に属するにもかかわらず、人々の交流は活発におこなわれるという特徴がある。現在でも、中国との国境の鴨緑江に面した新義州あたりの町は、軍人や商人が多数駐在しており、これを対象とする歓楽街や書店、劇場なども進出しており、他の内陸地方には見られない知的、芸術的な雰囲気があり、リベラルな思想にふれる機会にも恵まれているという(伊藤、1996:159)。そうした特殊性の中で、宣教師ロスと商売をしにはるばる国境の町を越えて来た徐相崙は出会うことができ、比較的容易に聖書の配布もできたのではないかと推察する。満州から国境付近の村々では、宣教師が訪れる以前から、キリスト教が聖書を通して韓国人の手で伝わっていたという報告がなされている(関、1981:162)。

米国聖書協会の宣教師が日本滞在中の李樹廷に目をつけたのは、これも当然の成りゆきだったであろう。いずれは、すぐ海を隔てた韓国に伝道を開始するための第一歩が聖書翻訳であるからである。李樹廷は日本人の優れたキリスト者に出会い、洗礼にいたるわけであるが、韓国伝道の道ぞなえになった李樹廷を支え、韓国伝道を実現に到らせたのはアメリカの宣教師達の活動の成果であった。また、忘れてならないのは聖書協会の働きである。聖書協会の役割は聖書の翻訳、出版、頒布普及である。東洋伝道初期の段階で貢献したのは、北英国聖書会社(スコットランド聖書協会)、大英国聖書会社(英国聖書協会)、そして米国聖書会社(米国聖書協会)である。ロス訳を日本で出版し、頒布したのは北英国聖書会社で、李樹廷の『マルコ福音書』を出版したのは米国聖書会社で、資金面から普及のための普及員(colporter)の手配にいたるまで、幅広く事業を行ったのである。日本でヘボン等により聖書翻訳委員会社中を発足させたが、これは米国聖書会社の事業の一環であった。そして、こうした一連の聖書翻訳の流れの中に、宣教師を中心とした韓国での聖書翻訳の進歩も組み込まれていたと見てよい。

宣教師達の文書活動は聖書翻訳だけではなく、翻訳に取り組む以前に、言語の習得、字典の編纂、そしてその国の社会、文化研究である。3章でふれた唯一神の訳であるが、1583年に初めて中国に入った、イエズス会の中国伝道創始者マッテオ・リッチが中国古典の「天」や「上帝」をキリスト教の神に近づけようとして以来、宣教師達は各国特有の神の用語を研究していった。韓国においても同様に、宣教師達は韓国研究の中から検討を重ね、韓国独自の神、ハナムを唯一神として採用することになった。宣教師達の研究活動は人類学者に引用される

ほどに真摯なものであったという（関、1981：223）。アンダーウッドは1931年に *A Partial Bibliography of Occidental Literatures of Korea* を発行し、1594年から1930年までに韓国研究の欧米の書籍が2882冊あることを示している（関、1981：224）。

異文化社会での困難な生活や活動のため、宣教師達は特に、助け合い、協力、連帯意識が必要だったと思われる。アンダーウッドがアメリカから韓国に向けて出発し、日本に立ち寄った時、ヘボン夫妻が出迎え世話をしている。アンダーウッド夫人が宣教師達の連帯感について以下のように書き記している。“The Hepburns, who had then been in Japan a long time, met him and took him at once to their warm hearts and comfortable home. In the Orient, wherever one missionary meets another, he meets a brother; his house, his purse, his time, everything is at his friend’s disposal. Why? Because first of all, you are the representative of a great Board in America that pays its indebtedness.”（Underwood, 1918：37）。

アンダーウッドは韓国での活動を開始してから後も、病気の治療、アンダーウッド夫人の病の転地療法などで日本を頻繁に往復している。また、横浜の米国聖書協会から『韓英文法』を出版、聖書の改訳の出版を北英国聖書協会に依頼、聖書翻訳委員会設立のアドバイスをヘボンからうけるなど、日本滞在の宣教師や聖書協会の協力を得て、韓国伝道を進めていったのである。また、中国に滞在中の宣教師達も韓国を訪れ伝道方法のアドバイスをしている。その代表的なものに、ネビアス方式と呼ばれている伝道方式がある。イギリスのネビアス（John Nevius）が1890年に中国から韓国に入国し、宣教師達に提供した伝道方式の原則であるが、中国においてより韓国において成果を上げ、韓国におけるキリスト教発展に貢献したものである。

以上、初代宣教師達の活躍を聖書翻訳を中心に述べてきたが、韓国における宣教師達の活動は、中国、日本における宣教師達との関わりを抜きにして語ることはできないことが確認できたように思われる。欧米の関心が中国から始まり、それに伴い宣教師たちが中国、日本、そして韓国へと流れていった。そうした流れの中で、韓国だけがキリスト教が異常な勢いで発展していったのである。発展の要因は様々あるが、1888年に韓国に入国した宣教師で、文書活動に貢献し『韓英字典』を出版したゲール（J.S. Gale）が、日本の雑誌、『新人』（15巻10号、1916年発行）に「朝鮮における長老教会の現状」と題して聖書翻訳に関する点を述べている。すなわち、韓国における伝道方法の成功要因として、「第一に聖書を簡単なる俗語に翻訳して、凡て之を簡易なる朝鮮文字の印刷に附した事である。而して其の目的は婦人小児にも容易に之を学び得らるる程度に成すといふ事に在った。既に教育あり又文字ある人士の為には漢訳聖書が伝えられてあったが、近年之に代えて漢鮮混交體の版を完成した。」と、述べている。韓国における宣教師達が出会ったハングル文字は、漢文のような文書文字とはちがひ、生活に密着した庶民に親しまれる文字である。また、最高神ハナムを聖書の神の訳語に使用したことなどが、宣教師達の活動をより一層庶民に近づける原動力となったと推察される。

本稿で述べたことは、韓国におけるプロテスタント宣教の最初の1ページにしかすぎない。しかし、聖書がプロテスタント伝道の命であるからには、第1ページの聖書翻訳の訳出過程と

後藤田 遊 子

それに伴った出来事が、その後のキリスト教の発展に非常に重要な影響を及ぼしている事が、韓国キリスト教史をひもといたときに鮮明になってくるのである。

注

1. 18世紀の敬虔主義的、信仰復興的なキリスト教運動（イギリスのメソジスト運動など）
2. 本稿では宣教師はすべてプロテスタントの宣教師のこととする。また、国名であるが、朝鮮か韓国か呼び名は議論の分かれるところであるが、ここでは基本的に、韓国と呼ぶ。
3. 以上、都田恒太郎著の『ロバートモリソンとその周辺—中国語聖書翻訳史—』から引用した。
4. 1882年に朝鮮の首都、漢城（ソウル）でおきた軍人暴動。これには日清両国が武力干渉したが、両国の利害と開国派の思惑がからんでいた。

参 考 文 献

- 海老澤有道：『日本の聖書・聖書和訳の歴史』日本基督教団出版局、1981
小川圭治、池明観編：『日韓キリスト教関係史資料』新教出版社、1984
ジャック・ジェルネ：『中国とキリスト教』蒲田博夫訳、法政大学出版、1996
J. ゲール：「朝鮮に於ける長老教会の現状」『新人』15巻10号、1916
都田恒太郎：『ロバートモリソンとその周辺—中国語聖書翻訳史—』教文館、1974
日本聖書教会編：『日本聖書教会100年史』日本聖書協会、1975
藤原藤男：『聖書の和訳と文体論』キリスト新聞社、1974
関庚培：『韓国キリスト教会史』新教出版社、1981
李永獻：「李樹廷論」『教会と神学』vol.3 大韓イエス教長老会神学大学、1970
Bishop I. B. : Korea and Her Neighbors Yonsei University Press, 1970
Paik L. G. : The History of Protestant Missions in Korea Yonsei University Press, 1970
Palmer S. J. : Korea and Christianity Royal Asiatic Society Korea Branch, 1967
Tae-Hwan Kwak: U.S.-Korean Relations, 1882-1982 Kyungnam University, 1982
Underwood L. H. : Underwood of Korea Yonsei University Press, 1983